

Calendar にちなんカレンダー 10月

Calendar grid for October with days of the week (日, 月, 火, 水, 木, 金, 土) and dates (1-31). Includes icons for recycling and other notices.

燃やせるゴミ 燃やせないゴミ (小型) 古紙類 (新聞・雑誌・ダンボール・牛乳パック) 生びん びん・缶類 布類
ペットボトル ハップースチロール 粗大ゴミ (一辺が60cm以上のもの) 有害ごみ (乾電池・蛍光灯)
※大宮・阿毘縁・山上には三栄・矢戸の一部も含まれますのでご注意ください。

★カンガルークラブ通信★ Vol.150
8月は、奥出雲町のわくわくプールに行きま
した。まだ歩けない子どもさんは浅いプールで
水遊び、2歳前後にもなると手を引いてもらい
ながら上手にはた足で泳いだりして、午前中
しっかり遊びました。
遊んだあとは、民宿でおなか一杯に風食を食
べましたよ。猛暑の最中とはいえ、水遊びが大
好きな子どもにとっては最高の一日でした。
今回の会は、個人的には職場復帰を控えてい
たため最後の参加となりました。
カンガルークラブや子育て支援セン
ターで過ごした一時は、育児をスタート
した母親や子どもにとってはとても貴重
な時間でした。自分が責められることな
く「そつたよね」と言って受け入れてく
れる人がいる……そんな些細な一言が、
周囲が思う以上に母親の心を救うのだと
実感しました。この時期の人とのつなが
りや思い出は一生ものです。
支援センターの先生方、お母さんや子
どもたち、どうもありがとうございました。
同じ時期を一緒に過ごせたことを感
謝しています。
ママさん
坪倉洋子 (福万来)

短歌

編集室選

自由律俳句

おおくさ編集室選

俳句

北川迎亭選

聳えたつ稲積山の山麓の 稲田は黄色く夕陽に映えて
萩原 西村 友昭
猛暑日のひと日どこか秋らしき 風にさまよう赤とんぼ舞う
茶屋 三上 高子
いちばんの大き籠もち初採りの胡瓜をとらむ露に濡れつつ
折渡 青戸紀栄子
「無理するな元気でいてよ」と娘の便り 八十五歳になるとう吾に
下阿毘縁岸 露子
在りし日の母の好みし藤椅子に父はひたすら新聞を読む
花口 平田 栄
久しぶり墓参に会えた孫娘 また逢いに来ると言い残し行く
多里 村本 修
先輩の免許更新止めると言う 我も感じる歳とはなりぬ
神戸上 小谷 大平
日野川に鳴けるかじか声涼し 墓所の夫と共に聞きいる
生山 寸古幾幸江
鉢巻に錨をつけて励みいし海軍工廠なつかしきとも
下石見 山形 春子
とおき日の母の言葉が胸よぎるくじけそうなる葉桜の宵
萩原 西村 初音
この年も胡瓜はほどよく太りたり初物なれば祖先に供う
下石見 矢田貞勝代
故郷の数軒の集落は お盆賑わいひぐらしを聞く
河上 長崎美佐子
脱皮する神秘の一瞬鬼やんま生命の羽の朝露に濡れ
阿毘縁 木村 民子
物干しの柱に二つ空蟬の 我より早く目覚めて立ちぬ
宝谷 横谷 秀子
日南のマラソン今年で終りなり 夢の十年灯りの消ゆる
阿毘縁 重親ミチコ
八月の十五日の今日終戦日 戦死の友の次々と頭つ
(訂正歌) 豊栄 田邊 青志
あとがき
先月号で校正ミスが有りましたので、訂正歌を載せました。今
月も秀歌が揃いました。よくよく鑑賞してください。 青志

そんな所に巢を掛けて大丈夫つばめさん 茶屋 木山 操子
くねくねとほんの束の間見せる山の稜線 茶屋 小林 道子
白く光るあれは太陽朝霧の中 茶屋 岸本寿山人
ウオーキング大会散った桜ふみしめてゴール 神戸上 柴田 篤子
カッコーの初声聞いて若葉つややか 茶屋 岸本 治枝
スルスルとかけ足している朝顔のつる 茶屋 木山 輝子
今年も色んな野菜私の心もわくわく 印賀 久代 幹子
咲きました鼻が剪定する亡夫の後姿 生山 弓場 里恵
梅雨晴れうれしく蜂の羽音が胡瓜の花 生山 渡辺 圭子
其処まではと刈り倒して行く草の丈 茶屋 藤原 寿郎
右の掌に意外な弾力を初夏の椅子 松江市 阿川 花子
散歩道、紫陽花色とどりの肌寒い朝 生山 鹿取 京子
川柳 (折れる)
アメリカも折れる普天間基地移転 矢戸 磨利 忠雄
折り返す事も出来ずに八十となる 印賀 山脇 文字
高嶺の花折れば夢までしほみそう 霞 久城 英代
同居には折れて家族が丸く住み 霞 足羽喜久江
柳腰風折れせずに盆踊り 下石見 浅川 孝道
雲行きが怪しいこは折れておく 矢戸 井川 禮子
最後には折れて娘を嫁にやる 新屋 出垣 千孝
(自由)
ぞわぞわと水木ロードはパレードだ 河上 青砥 静枝
小沢さんほどほどにして身を引けば 下石見 山形 春子
姥捨山年金だけが生きている 宮内 高見 吟蔵
大不況億持つ人が政治する 上石見 古川 貞美

鈴の音編集室選

翡翠に見惚れ釣人竿たたむ 三吉 伊田 カネ子
(寸感) まことに簡明な句である。翡翠について、少し記し
てみる。溪流や池沼などにさし交わした木の枝に静かに止つ
ていて、水中の獲物を捕つていたり、水面をかすめて一直
線に素早く飛んでいるところなどがよく見られる。魚を捕
えるのが巧みである。羽色がひじょうに鮮やかで、翡翠の
ような赤い嘴を持っている。かわせみとも、しょうびんとも
言い、音読してひすいとも言ふ。留鳥であるから四季見
かけるが、新緑の水辺にいる涼しさを賞して夏季とされて
いる。ただし、一種赤翡翠は夏鳥で、五月頃渡来する。全
身赤い極彩色で、俗に南蛮鳥(南蛮は唐辛子のこと)と言
い、また鳴声がキヨロロ、キヨロロと声をふるわすように
聞こえるのできようろとも、一雨来そうな時に鳴くので
雨乞鳥・水恋鳥とも言っている。やましようびんは、翡翠
の中でも最も羽色が美しく、深山の密林や溪谷に棲んでい
るが、迷鳥でめつたに見られない。
山翡翠は最も大きく、羽色が黒と白の鹿の子斑になっ
ているので、鹿の子翡翠の名もある。冠毛を立てたときは
実に美しい。日野郡下の山地の溪流にも棲み、キヤララ・
キヤララと鳴いてくれている。(一部歳時記参照)